

第29回夏期福音特別集会(2)(箱根湯本)

エホバの道とその証者

――イザヤ書第42章、43章――

1982年8月21日

小池辰雄

エホバの僕の歌 無道の道 十字架で無を賜った 無の実存 空即是色 新しき歌 天的必然
性 無者となれば本当の証者 汝はわが有なり われ自らの故に

【イザヤ42】

1 わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人をみよ、我わが霊をかれにあ
たえたり。かれ異邦人に道をしめすべし。2 かれは叫ぶことなく声をあぐる
ことなくその声を街頭にきこえしめず。3 また傷める蘆をおることなくほの
くらき燈火をけすことなく、真理をもて道をしめさん。4 かれは衰えず喪膽
せずして道を地にたておわらん。もろもろの島はその法言をまちのぞむべし。

5 天をつくりてこれをのべ、地とそうえの産物とをひらき、そのうえの
民に息をあたえ、その中をあゆむものに霊をあたえたもう神エホバかく言い
給う。6 云く、われエホバ公義をもてなんじを召したり。われなんじの手を
とり汝をまもり、なんじを民の契約とし異邦人のひかりとなし、7 而して、瞽
の目を開き俘囚を獄よりいだし、暗きにすめるものを檻のうちより出さし
めん。8 われはエホバなり、是わが名なり。我はわが栄光をほかの者にあた
えず、わがほまれを偶像にあたえざるなり。9 さきに預言せるところはや成
れり。我また新しきことをつげん。事いまだ兆さざるさきに我まずなんじら
に聞かせんと。

10 海にうかぶもの海のなかに充つるものもろもろの島およびその民よ、エ
ホバにむかいて新しき歌をうたい、地の極よりその頌美をたたえまつれ。
11 荒野とその中のもろもろの邑とケダル人のすめるもろもろの村里はこえを
あげよ、セラの民はうたい山のいただきよりよばわれ。12 栄光をエホバに
かうぶらせ、その頌美をもろもろの島にて語りつげよ。13 エホバ勇士のごと
く出たもう。また戦士のごとく熱心をおこし、声をあげてよばわり大能をあ
らわして仇をせめ給わん。14 われ久しく声をいださず黙して己をおさえたり。
今われ子をうまんとする婦人のごとく叫ばん。我いきづかしくかつ喘がん。
15 われ山と岡とをあらし且すべてその上の本草をからし、もろもろの河を島



とし、もろもろの池を涸さん。¹⁶ われ聾者をその未だしらざる大路にゆかしめ、その未だしらざる径をふましめ、暗きをその前に光となし、曲がれるをその前になおすべし。我これらの事をおこないて彼らをすてじ。¹⁷ 刻みたる偶像にたのみ鑄たる偶像にむかいて汝等はわれらの神なりというものは退けられて大いに恥をうけん。

¹⁸ 聾者よきけ、聾者よ眼をそそぎてみよ。¹⁹ 聾者はたれぞ、わが僕にあらずや。誰かわがつかわせる使者の如き聾者あらんや。誰かわが友の如きめしいあらんや。誰かエホバの僕のごときめしいあらんや。²⁰ 汝おおくのを見れども顧みず、耳をひらけども聞かざるなり。²¹ エホバおのれ義なるがゆえに大いにしてとうとき律法をたもうをよろこび給えり。²² 然るにこの民はかすめられ奪われて、みな穴の中にとられ獄のなかに閉じこめらる。斯てその掠めらるるを助くる者なく、その奪われたるを償えという者なし。

²³ なんじらのうち誰かこのことに耳をかたぶけん、たれか心もちいて後のために之をきかん。²⁴ ヤコブを奪わせしものは誰ぞ、かすむる者にイスラエルをわたしし者はたれぞ、是エホバにあらずや。われらエホバに罪をおかし、その道をあゆまず、その律法にしたがうことを好まざりき。²⁵ この故にエホバ烈しき怒りをかたづけ、猛きいくさをきたらせ、その烈しきこと火の如く四圍にもゆれども彼しらず、その身に焚せまれども心におかざりき。

【イザヤ 43】

¹ ヤコブよなんじを創造せるエホバいま如此い給う。イスラエルよ汝をつくれるもの今かく言給う。おそるるなかれ我なんじを贖えり。我なんじの名をよべり。汝はわが有なり。² なんじ水中をすぐるときは我ともにあらん。河のなかを過るときは水なんじの上にあふれじ。なんじ火中をゆくとき焚るることなく火焰もまた燃えつかじ。³ 我はエホバなんじの神イスラエルの聖者なんじの救主なり。われエジプトを予えてなんじの贖代となし、エテオピアとセバとをなんじに代う。⁴ われ見てなんじを宝とし尊きものとして亦なんじを愛す。この故にわれ人をもてなんじにかえ民をなんじの命にかえん。⁵ 懼るるなかれ我なんじとともにあり、我なんじの裔を東よりきたらせ西より汝をあつむべし。⁶ われ北にむかいて釈せといひ南にむかいて留むるなかれといわん。わが子輩を遠きよりきたらせ、わが女らを地の極よりきたらせよ。⁷ すべてわが名をもて称えらるる者をきたらせよ、我かれらをわが栄光のために創造せり。われ曩にこれを造りかつ成しおわれり。

⁸ 目あれども聾者のごとく耳あれども聾者のごとく民をたずさえ出でよ。国々はみな相集いもろもろの民はあつまるべし。彼等のうち誰かいやさき



に成るべきことをつげ之をわれらに聞かすることを得んや、その証人^{あかしびと}をい
して己の是^ぜなるをあらわすべし。彼等ききて此はまことなりといわん。10エ
ホバ^{のたまわ}宣給く、なんじらはわが証人わがえらみし僕なり。然ればなんじら知り
てわれを信じわが主なるをさとりうべし。我よりまえにつくられし神なく我
よりのちにもあることなからん。11ただ我のみ我はエホバなり。われの外^{ほか}に
すくう者あることなし。12われ前^{さき}につげ、また救いをほどこし、また此事を
きかせたり。汝等のうちには他神^{あだしなみ}なかりき。なんじらはわが証人^{あかしびと}なり。わ
れは神なり。これエホバ宣給^{のたまえ}るなり。13今よりわれは主なり。わが手より救
いだし得るものなし。われ行わば誰かとどむることを得んや。14なんじら
を贖うものイスラエルの聖者エホバかく言いたもう。なんじらの為にわれ人
をバビロンにつかわし彼処にあるカルデヤ人をことごとく下らせ、その宴樂^{あそび}
の船にのりてのがれしむ。15われはエホバ、なんじらの聖者、言いたもうを
創造せしもの又なんじらの王なり。

16エホバは海のなかに大路をもうけ大いなる水のなかに径^{みち}をつくり、17戦車
および馬、軍兵^{つわものもの}武士をいできたらせ、ことごとく仆れて起こることあたわず、
皆ほろびて燈火^{ともしび}のきえうするが如くならしめ給えり。18エホバ言い給わく、
なんじら往昔^{むかし}のことを思いいづるなかれ、また上古^{いにしえ}のことをかんがうるなか
れ。19視よわれ新しき事^{わざ}をなさん頓^{やが}ておこるべし、なんじら知らざるべけんや。
われ荒野に道をもうけ沙漠に河をつくらん。20野の獣^{あが}われを崇むべし野犬お
よび駝鳥もまた然り。われ水を荒野にいだし河を沙漠にもうけてわが民わが
えらびたる者にのましむべければなり。21この民はわが頌美^{ほまれ}をのべしめんと
て我おのれのために造れるなり。

22然るにヤーヴェーよ汝われを呼びたのまざりき。イスラエルよ汝われを
厭^{いと}いたり。23なんじ燔祭のひつじを我にもちきたらず犠牲をもて我をあがめ
ざりき。われ汝にそなえものの荷をおわせざりき。また乳香をもて汝をわす
らわせずざりき。24なんじは銀貨^{かね}をもて我がために菖蒲^{あやめ}をかわず、犠牲のあぶ
らをもて我をあかしめず、反りてなんじの罪の荷をわれに負わせ、なんじの
邪曲^{よこしま}にて我をわずらわせたり。

25われこそ我みずからの故によりてなんじの咎^{とが}をけし汝のつみを心にとめ
ざるなれ。26なんじその是^ぜなるをあらわさんがために己が事をのべて我に記
念せしめよ。われら相共にあげつらうべし。27なんじの遠祖^{とおつおや}つみをおかし汝
のおしえの師われにそむけり。28この故にわれ聖所の長^{おさ}こちを汚さしめヤコ
ブを誑^{のろ}わしめイスラエルをののしらしめん。



●エホバの僕の歌

イザヤ書42章1節から4節までがいわゆる「エホバの僕の歌」の第一の歌です。預言者の言葉は決していわゆる論理ではない。波状的に怒濤のように押し寄せてくる。これはもちろん詩文です。

「わが扶くるわが僕わが心よろこぶわが撰人をみよ、我わが霊をかれにあたえたり。かれ異邦人に道をしめすべし。²かれは叫ぶことなく声をあぐることなくその声を街頭にきこえしめず。³また傷める蘆をおることなくほのくらしき燈火をけすことなく、真理をもて道をしめさん。⁴かれは衰えず喪膽せずして道を地にたておわらん。もろもろの島はその法言をまちのぞむべし。

「法言」というのは「律法」「トーラー」という字です。「わが僕」「わが撰人」とある。それは御霊を与えられたという。

一体、エホバの僕の歌というのは誰が書いたか。これは第二イザヤ、名のないイザヤだと私は思います。「エホバの僕」といわれるのは一体、誰のことか。これは実証的には、学問的には言えない。しかし、これだけの神の言を伝える者は、無名の預言者イザヤ自身がこのような質の人間でなければ、こういうものが響いてこない。そういう内的な理由で、私は彼自身がそれを三人称で書いていると思う。特にイザヤ書53章のところになると、それからもうひとつ抜け出した世界にはいります。若い人は、こういう言葉は自分への神さまの御声として暗誦するくらいに血となし肉となしてください。

神さまの一方的な理由で僕にされ選ばれている。こちら側のいかなる理由にもよらない。もちろん、神さまは選ぶのにいい加減な選びかたをなさらない。

「わが霊をかれに与えた」

とある。今度は、私たちはキリストに

「わが霊を汝に与えた」

と言われる。エホバの背後にはキリストの霊があります。旧約聖書は、私たちはキリストの霊で読めます。「エホバ」とはイスラエルに現れた神さまの名前ですけれども、その神を顕現したのはイエス・キリストですから。

「わが扶くるわが僕、わが心よろこぶわが撰人、汝の中に我わが霊をあたえたり」

と読む。「かれ」ではなくて二人称にして読む。我々が読むときにはその角度から読まなくてはダメです。僕の資格は何かというと、その内実は何かというところ、エホバの霊、キリストの霊です。キリストの霊がきてなければ、それは空名になってしまふ。パウロがキリストの僕となれたのは、キリストの御霊が完全に彼を占領したからです。でなければ、聖霊の人とされなければ、僕の実はあがつてこない。「霊」という字は一番大事な「ルーアツハ」という字です。風、気、霊はみな同じ字です。



「かれ異邦人に道をしめすべし」

とある。特に「異邦人」とある。即ち、第二イザヤの音信はイスラエルに限ってないで、突き抜けている。「異邦人に」というのは別の言葉でいうと、「全世界の国々に」ということになる。パウロが異邦人へのキリストの僕となつたわけです。第二イザヤの消息は、「イスラエル」と言いながら、それを突き抜けている。

異邦人に道を啓示する。この「道」という字は「ミシュパート」という字が特に使つてある。

「審判」

という字です。この字は別な意味で、

「セデック(義)」

とも通ずる。神の義(セデック)のあらわれが審判(ミシュパート)なんです。

●無道の道

正道を、天地の公道を伝える。老子にいわせると、これは大道となる。

「大道廢れて仁義あり」

「道の道とすべきは常の道にあらず」

と言つた。それを「無道の道」と言つたわけです。旧約の世界は何といつてもまだ律法的な角度が強いですから。しかし、預言者になると、いわゆる成文律をもうひとつ乗り越えた、神の御言が直ちに「道」という角度になつてきています。それをもうひとつ突き抜けたのがキリストですけれども。神さまの道は、「これが道である」と言つてこちら側から判断できるとは道ではない。

「わが思いは汝らの思いと異なり、天地の差のごとく違う」

と、イザヤ書55章にでてくる。

「エホバ宣給く、わが思いはなんじらの思いとことなり、わが道はなんじらの

みちと異なれり。天の地よりたかきがごとく、わが道はなんじらの道よりも

高く、わが思いはなんじらの思いよりもたかし。」(イザヤ55・8-9)

とある。

「お前さんたちの思うような道とは違うぞ」

という。無道の道ということ。もうひとつ別な言葉でいうと、それは至道だ。極道といつてもいい。大体、日本人は道の民ですから。茶道、柔道、剣道、書道、華道という。真理を身をもつて体現することを道というんです。

「我は道なり、真理なり、生命なり」

とキリストはヨハネ伝で言われた。真理が身に体されて、それが身証されてくる。身をもつて証しされてくる。それを道という。頭で考えられて、どんなにそれが正しいように思われたって、それは思われた世界でダメなんだ。実現、実証、体現の道でないとダメです。



そういう無道の道、限定することのできない無限定の道なんです。無限定道です。

自然現象でいうと、鳥の姿です。鳥の飛んでいる姿が自然法則に自由に従っている。どんなに素晴らしい飛行機ができたって、鳥の飛びかたにはかなわない。あれは生ける道だ。その道を通った跡が全然ない、あとかたもない。

老子はでかい魂だ。

「仁だの義だの、愛だの義だのと言っているけれども、それは大道が廃れたからであって、大道の世界に入ってしまうと、そんなことは言わなくても愛も義も自然になっていくのだ」

と。それは大道であり、天道である。私たちのキリストの天道です。キリストは「我は道なり」とは、

「我は天道なり」

ということですよ。「この天道を伝える」と、第二イザヤ書はキリストのことをその角度から預言しているわけだ。

各人がとぼとぼと歩いて行く、それを「路^{みち}」という。草を分けて歩いていくのが路です。私たちは道を路^{みち}する。こういう言葉はないけれども、道を路^{みち}さなければいけません。それはどういうことかという、自分たちが歩く路が道に、大道に即することなんです。皆さんが毎日歩かされている人生の路はみなそれぞれです。人真似はいらん。一人ひとりがのつぴきならない路を歩かされている。苦難の路があったり、いろいろだ。それがこの

「キリストの天道に、大道に即しているか」

それだけが問題です。それを本当の道路という。道を路するような歩き方をしなくてはいいかんわけです。

それはいかにして可能かという、^{「聖霊を与えたり」}ということですよ。聖霊がくると、この天道が身に体せられてきますから。生きた天道が身に体せられてくると、これは観念の世界ではないから、毎日毎日その内容は、その現れ方は千変万化してくる。それが千変万化して示されるものがこの路になるわけです。何をやっていったってそうです。だから、天道即地路、地路則天道ということですよ。

●十字架で無を賜った

「我は真理なり」といったって、これは無限定の真理ですから。「これが真理でござる」なんて、こちら側からは言えない。

2 かれは叫ぶことなく声をあげることなくその声を街頭^{ちまた}にきこえしめず。

これは珍しい言葉です。普通はすぐ大衆伝道をやりたくなくなるんでしようけれども。

3 また傷める蘆^{あし}をおることなくほのくらき燈火^{ともしび}をけすことなく、真理^{まこと}をもて道をしめさん。



虐げられた人、弱者、悩める者、病める者、人に顧みられない者、そういったような人たちに本当に道を示す。非常に憫みの深い消息です。

「病める者が医者を要す。私はそのために来た」

とキリストは言われた。

「罪びとを探しに、罪びとを相手に私はやって来た。自分は正しいなんて思う

ような奴は要らないんだ」

というのがキリストです。だから、パリサイはキリストの敵だったでしょ、

「偽善なるかな、学者パリサイ人よ」

と仰った。「おれは何者かだ」と思っているやつはみな、キリストにはダメなんです。キリストは神さまの前で「おれは」なんてひとつも言わない。

「何もできません、何も言えません。どうぞ、御言をください、力をください」

と、キリストはいつも神さまに投げ込んでいる。弱いというのは、キリストくらい弱いひとはない。弱い極致は無力ということです。無力、無能、無言、無教、そういう人です、無者です。

どんなに神学者たちが私を攻撃しても、私は絶対にこの真理から退かん。どうせ、現代においては容れられなくなっていく、のけ者にされて結構なんだ。キリスト・イエスがみんなに退けられて、一人で十字架にかかった。十字架道というのはそういうことです。

無を賜ったというのは本当にありがたい。いや、本当です、もう問題ないですよ。毀誉褒貶、何もどうでもよくなってしまう。これは賜りたる無であって、悟ったのではない。無を賜ったんだ。それが本当の無の道なんだ。これは無限無量なる道です。

そういった者に道を示すというのは、この点ではある意味において、私は第二イザヤを乗り越えてものを言っている。傷める者、ほの暗き氣息奄々たる者に、いわゆる

「俺は健康だ、俺は何とかだ」

と威張っている奴よりもつと素晴らしいものを与えるぞという。「道を示す」というよりも、私は「道を与える」と言いたい。道をただ示されたって、これは歩けないですよ。

「ほの暗き燈火を更に熾んにしてやる、傷める葦を強い葦にしてやる」

というのが、その力ある道なんです。力道を与えるぞということ。とても概念で規定することのできない妙道である。それが本当に霊道なんです。正しいというなら、これくらい正しいものはない。そういう道が大道、天道ということです。

日本人は本来、道の民なんだから、もう一遍それを福音的にリバイバルしなくてはいいかん。今の教育なんてものは絶対に道でない。

「真理をもて道をしめさん」

とある。即ち、道は真理に即していますから。

「我は道なり、真理なり、生命なり」



というキリストの言葉はやはりこういうようなところから自然に出てくるのでしょね。体現できないものは真理ではない。ただ理屈で考えた真理ではない。聖書という真理は必ずそれは実現できるものです。

「真理」「エメツ」という字は「アーメン」という字からきている。

「アブラハムはエホバを信じた」

とは、

「アーメンと言った」

ということです。

「神さまをアーメンとした。そしたら、神さまはアブラハムを義とした、義よしと言われた」

ということ。全的に神さまに対してアーメンと言う。それが「義」なんです。義を賜ったんです。こちら側はちつとも義ではない。自分を否定して、アーメンと言って全的に向こうを無限大にしたら、こっちはゼロになった。それが義なんだ。これは――親鸞が言ったけれども――正に「無義の義」なんです。親鸞の義は「ことわり」ですから、ことわり無きことわりです。義という字と同じです。

この言葉はキリストがマタイ伝12章で引用しておられるから、キリストはここが好きだった。

●無の実存

4 かれは衰きえず喪おしえ膽おしえせずして道を地にたておわらん。もろもろの島はその法言おしえ
をまちのぞむべし。

義をたておわるぞ、本当の審判をたておわるぞと。そういう角度はもちろんその中にありますけれども、この場合の「法言おしえ」(トラー)はモーセの十誡のことを言っているわけではない。十誡の根本精神は生きたものですから、そういったトラーを待ち望むべし、それに「信賴せよ」ということです。

そういうエホバの僕、わが僕というのがあるから、それによく注目しろと。これがエホバの僕の歌の第一歌というわけです。

この世では、いわゆる権勢や力ある者がはびこっているけれども、しかし、柔和なる者が地を嗣ぐという。キリストの消息は全部それをひっくり返している。それは、ただ弱々しいものが良いと言っているのではない。強いとか弱いとか言ったって、人間は要するに五十歩百歩なんです。神さまの力に対しては、神さまの光に対しては、神さまの生命に対しては、みなこれは比較にならない。だから、むしろ、

「何者でも無いというところに徹しろ」

ということ。それが徹せない。徹することができないのが罪なんだから。



「だから、私は徹する事態をお前にやるぞ」

というのが十字架がくださったところの無なんだ。

⁵天をつくりてこれをのべ、地とそのうえの産物とをひらき、^{なりいもの}そのうえの

民に息をあたえ、その中をあゆむものに霊をあたえたもう神エホバかく言い給う。^い^わ⁶云く、われエホバ公義をもてなんじを召したり。われなんじの手を

とり汝をまもり、なんじを民の契約とし異邦人のひかりとなし、

「公義をもてなんじを召した」とは、^{ただしき}

「義に即するように義へと汝を召した、汝を召して義にするぞ」

という言い方です。

⁷而して瞽の目を開き、^{めし}^い囚を獄よりいだし、暗きにすめるものを檻のうち

より出さしめん。

これはキリストの福音の預言みたいところだ。

⁸われはエホバなり、是わが名なり。我はわが栄光をほかの者にあたえず、わがほまれを偶像にあたえざるなり。^{とらわれびとひとや}

我また新しきことをつげん。事いまだ兆さざるさきに我まずなんじらに聞か

せん。

これはエホバの僕がどのような使命をもっているかということを重ねかけて告げられている所です。

「われはエホバなり、是わが名なり」

とある。「エホバ」は今は「ヤーヴェー」と読むけれども、「エホバ」というのは「わが主（アドナイ）」という言葉と実在者、「実存者」（ヤーヴェー）という言葉の両方を兼ねているから、私は「エホバ」という古い読みかたをそのまま使っている。ヤーヴェーというのは

「実存主」

ということ。「ある」という言葉には、在るということと何かを起こすという他動的な気持ちもその中に持っている。ドイツ語でいうと、「ヴィルクザーメス・ザイン」（働きをもっているところの存在）という。だから、私はこれを「在らしむる者」と読みたい。

「我は有りて在らしむる者なり」

ということ。これは絶対的な存在です。相対的ではない。絶対者、絶対的実存者です。

私はよく「無の実存」と言う。この絶対的実存者によって在らしめられるときには、無の実存はその中に絶対有がきている。絶対無と絶対有は即するんです。これは相対的な有無の概念ではない。絶対無は絶対有に即する。だから、自分が無くなると、これは力が働くんです。無くなった所にこそ本当の力が働く。在らしむる者がここでもって在らしめているから。

だから、「エホバ」（実存主）という言葉は素晴らしい。「実存主」によって在らしめられ



ているのが本当の無^い、実^に存^のの実体なんです。私たちにとつては、実存主はキリストです。キリストは天界に在りて私たちを在らしめる。在らしめる時の、在らしめるその作用は何か。それは聖霊にある。キリストは独りで天界に霊界にいらつしやる。それが私たちに全的にみなやつてくる。その在らしめる力は聖霊です。聖霊が入ってくるから、私たちは在らしめられている。だから、十字架で無者とされた所に聖霊が働く。○の中に十の図、

「⊕」

が聖霊・十字架の印だ。

●空即是色

そういうところがピシャツと決まったら、もう問題ない。皆さん、祈りというのは、その中に入ってくださいよ。それから個々の祈りを祈ってください。お願いを先に祈ってはダメです、キリストの中に自分を入れなければ。それから祈ってください。力がくるから。そうでない祈りをしたら、くたびれてしまうよ。黙って自分を十字架という門を通して投げ入れてごらん。もう十字架ですつとんでいるんだから。

「我はエホバなり、これわが名なり」

「我はキリストなり、これわが名なり」

と。「キリスト・イエス」という。「イエス」は肉の名です。地上に現れたことを「肉となれり」という。我々と同じ肉体的存在、サルクスとなった。「キリスト」はロゴス・キリストです。

「初めに言^{ことば}あり」

という。これは昔は

「初めに道あり」

と書いた。「道」という字は動詞にすると「いう」と読む。

キリストは霊界にいらつしやる。エホバの神として自由にその背後にいらつしやる。仏教的にいうと「キリスト」は空^{くう}で「イエス」は色^{しき}の世界です。

「空即是色」

という。「キリスト」は「油そそがれたる者」という意味だけれども、これは空の世界、本体界です。イエスは色、現象界の世界です。本体と現象が一つになる。お釈迦さんの世界だつてそうなんだ。「如来」という方は空の世界、「釈迦」は色の世界です。釈迦のことを応身^{おうしん}という。法に応ずる身を法身^{ほふしん}という。イエスは応身なんです。「キリスト・イエス」というのは「空即色」「色即空」を表すような言葉だ。キリストは道、イエスは路だ。

そのような実力をもったイエス・キリストの名を、その実名をペテロもパウロも持つていた。

「わがうちにあるものを汝に与える。イエス・キリストの御名によりて歩め」



とえば、これは実名だから、^{あしなえ}跛者が立ってしまった。使徒行伝のペテロ、パウロは凄い。彼らは本当に無の実存です。

「私の信仰が何かしたと思うな。私ではないぞ、キリストだぞ」
と、ペテロまで言っている。信仰なんか問題にしてない。「信仰が厚いの薄いの」ということは止めましょう。

「私は厚い信仰も、厚いも薄いも何ありません。ただ有るのはキリストだけです」
と。そういうところに入っていないと、グワーツとしたものが来ない、自分の信仰なんでものを問題にしているうちは。キリストの言葉に躓きなざるな。キリストも躓くようなことをおっしゃるからね。

「汝の信仰、汝を救えり」

なんて仰るから、

「さあ、私の信仰はなかなか救うところまでいかないな」

なんて、自分の信仰が何かと思っている。信仰とは何ですか、

「キリストを一切とする」

ということではないですか。

言葉というのは説明だから、これはしょうがない。私が言っていることは一体どういう現実を、霊的な内容を語っているのか、ということを読んでくださらなくては。私の言葉も暗号ですから。言葉じりでもってどうのこうのと言っているうちは始まらない。いわゆる学者というのはそういうのが多いから困る。絶学の学でなければ。私の「無の神学」はそこらの神学とは違うから、躓きの神学だ。

●新しき歌

¹⁰海にうかぶもの海のなかに充^みつるものもろもろの島およびその民よ、エ
ホバにむかいて新しき歌をうたい、地の極よりその^{ほまれ}頌美をたたえまつれ。

「新しき歌をうたい」とある。第二イザヤは時々「新しき」と言っている。旧約聖書、新約聖書。旧^{ふる}き約束、新しき約束。この「新しき」というのは「ネオス」でなくて「カイン^ス」の方です。新しくてもすぐ古くなるのはネオスの方です。それでは、旧約は古くてダメかという、そうではなくて、時代的には旧くても本当のものは古びない。その中に新を、新しき要素を持っている。旧約聖書の中にも新が隠れている。モーセの律法も隠^{ひそ}められたる福音である。福音が隠れている。だから滅びない。

「律法の一点二画も全部成就される」

とキリストが言われたのは、それはその中に本当の新が貫いているからです。それは旧新一如の世界で常に新しい。福音は常に新しい。聖書はいくら読んでも常に新しい。この聖書ばかりは、「もう飽きてしまった」なんていうことはない。



第一級のものは繰り返し読んでも、まず飽きない。第一級のものを熟読玩味することです。第一級のものは言葉の背後から無限にいろいろなものが響いてきますから。

この「新しい」というのは古びない新しさです。繰り返し読めば繰り返すほど、新鮮なるものが、永遠なるものがそこから湧いてくる。永遠というのは時間的ではなくて質的です。質的に滅びないものを永遠という。

14 われ久しく声をいさず黙して己をおさえたり。今われ子をうまんとする
おんな 婦人のごとく叫ばん。我いきづかしくかつ喘がん。

この「叫ぶ」という字は呻くという字です。

15 われ山と岡とをあらし且すべてその上の本草をからし、もろもろの河を島とし、もろもろの池を澗さん。16 われ聾者をその未だしらざる大路にゆかしめ、その未だしらざる径をふましめ、暗きをその前に光となし、曲がれるをその前になおくすべし。我これらの事をおこないて彼らをすてじ。

暗黒を貫いて、神さまの救いの呻きが伝わってくるようなことをここで言っているわけです。

17 刻みたる偶像にたのみ鑄たる偶像にむかいて汝等はわれらの神なりというものは退けられて大いに恥をうけん。

18 聾者よきけ、聾者よ眼をそそぎてみよ。

これは非常に反語的なことを言って、イスラエルの不信の状態に対して神さまは戒めている。

19 聾者はたれぞ、わが僕にあらずや。誰かわがつかわせる使者の如き聾者あらんや。誰かわが友の如きめしいあらんや。誰かエホバの僕のごときめしいあらんや。

この場合の「僕」とは、ダメなイスラエル全体のことを言っている。イスラエルは僕としていたんだが、お前はダメではないかと言っている。同じ僕という言葉を使っても、こういう悪い内容の僕もある。本当は僕のはずなんだが、僕らしからざる僕だから、こう言っている。預言者は不信なる者に対しては忌憚なく神さまの審判を伝えている。それがドラマティックに展開していく。

「それでも私は棄てないぞ」

と。「いいよ、いいよ」なんて言っているのではない。

「ダメだぞ、だけど棄てないぞ」

と、預言者の言葉はこういう言い方なんです。

20 汝おおくの事を見れども顧みず、耳をひらけども聞かざるなり。

これは孔子も言っているような言葉だ。



● 天的必然性

21 エホバおのれ義なるがゆえに大いにしてとうとき律法をたもうをよろこび
給えり。

これは旧約の根本精神だ。ユダヤ人はモーセに現れた律法というものをいかに重んじ尊んでいるか、その気持は今の預言者のこの言葉に出ています。

本当の意味で法というのは大事です。全部「ダルマ」ですから。仏教の世界でも全部、法の世界です。

「かくならざるを得ず」

という法です。「すべしすべからず」ではない。かくならざるを得ずという天的必然性をもったのが法なんです。天的必然性は別な言葉でいうと、自由なんです。雨が降れば地面は濡れざるを得ない。風が吹けば木の葉は揺れざるを得ない。みな法の世界です。自然法、道徳法、霊法は全部、法の世界です。

それからはずれると、これがみなおかしなことになる。自然界の法則を今の文化文明がどれくらい破っているか。そのために逆に今度は困ってしまう。文明の行き過ぎだ。神さまだけが持つてらっしゃる太陽の核分裂とか核融合とかいう現象を人間が勝手に使うからおかしなことになる。その法則を知ることはいいが、それを私して使うからおかしなことになる。自然界でそれが動いているうちはいいけれども、人間界で欲でもって動かすから、原子爆弾なんていうことになる。それが爆発したら全世界は滅びてしまう。

そういう法が自由である。止むを得ない世界です。そういう意味において、私たちはもちろん言葉の一番本義においては法を尊ばざるを得ない。今は、いかにいわゆる法を犯しているところの事態が多いか。教育界でも何でもどうにもならない。教育に権威がないものだから、少年少女を導くこともできなくなってしまった。本当に全く情けない。あなた方は、現代の人生は本当に十字架を負っていかなければ本当に生きられませんよ。その十字架を負うのは、聖霊の力がなければ負えない。法のためには、福音のためには戦わなくてはダメです。

● 無者となれば本当の証者
イザヤ 43 章です。

8 目あれども聾者のごとく耳あれども聾者のごとく民をたずさえ出でよ。

まだ絶望しないから、なかなか懇ろに書いてある。

9 国々はみな相集いもろもろの民はあつまるべし。彼等のうち誰かいやさきに成るべきことをつけ之をわれらに聞かすることを得んや、その証人^{あかしびと}をいだして己^ぜの是なるをあらわすべし。彼等ききて此はまことなりといわん。¹⁰ エホバ^{のたまわ}宣給く、なんじらはわが証人^{あかしびと}わがえらみし僕なり。然ればなんじら知り



てわれを信じわが主なるをさとりうべし。我よりまえにつくられし神なく我よりのちにもあることなからん。

「なんじらはわが証人わがえらみし僕なり」

と、今度は逆にまた捕まえてしまっている。だから、ドラマチックに展開しているんです。審こうが、必ずそれは救わんがための審きである。

「証人^{しょうにん}」というといわゆる裁判の方の言葉になるから、「証者」という言葉の方が響きがいい。私たちの人生の目的はキリストの証者たることです。その他にない。何をしようが、福音の証者であること。無者となれば本当の証者となれる。みなこれは恩恵の力でなれます。みんな上の力です。

老子が「無為の為」と言っている。何もしないところに本当のことができてくる。無為ということは無作為ということ。自分で何か考えたり何かしたりするが――もちろん我々は考えますよ、我々が賜ったいろいろな働きは何を使ってもいいが――何が中心になっているかということだけが大事なことです。考えも感情も何でもいい。それは賜りたる性格や資質であるが、全部それは私中心だと、みなおかしくなります。キリスト中心なら、それは自由自在に使って、捨てるものは何もありません。ということは、自分を捨ててかかるといふと、そういうものが全部、今度は神のものとして、キリストのものとして活かされて作用してくる。それが無為の為^{ゐゐ}ということ。自分では作為しないが、賜りたる一切のものは、神・キリストの力で為になる。それを無為の為という。それは本当の思索もできるし、とにかく、賜っている我々の知情意の働きが全部、本当の意味で活かされていく。いわゆる禁欲なんていうことではない。そんな無内容なことではない。全部、それは十全に活かされていく。閉じ込められた世界に入ってはダメです。

「ただ我のみ我はエホバなり。われの外^{ほか}にすぐう者あることなし。

「ただ我のみ我はエホバなり」というのはヘブライ語で

「我は、我は、エホバ」(アノキ、アノキ、ヤーヴェー)

と言つて、「我」という字が畳みかけて書いてある。

「救主(モーシユアッハ)は私の他にはいないぞ」

ということ。我は我はと言っているのは、ヤーヴェーの神さまはいかに絶対的なものであるか、ということと言っている。神さまだけがはつきり「我」ということが言える。

「ただ我のみ実存主である、実存主は他にいないぞ」

とは、たくさん偶像の神がいたから、そう言っただけです。

「他の偶像の神がいて、それをよく拝んだりするが、冗談じゃないぞ、私ただぞ」

と言っているわけです。歴史的な現実としてそうなんです。

「他に救う者はないぞ」

と。イスラエルの民が不信でもってゴタゴタしているから冗談言うなという言葉です。



私たちにとっては、キリストに入ってしまったと今度は、キリストという我は宇宙的な我ですから、他にいろいろなものがあっても、それがインチキなものであれば、全部それを包んでしまう。ヘタすると、

「私はキリストだけで、他は仏教も何も要らん」

と、みな否定するようなことを言う。そんな狭いことではダメです。そうではなくて、逆に全部を活かす。イスラム教でも仏教でも何教でもいい、インチキでなければ。そういうものは相対的真理性があるから、全部活かしてしまう。キリストの神さまはそういう宇宙的な神さまです。

エホバの神さまは、イスラエルに向かって言っているときは、イスラエルの神さまだけれども、第二イザヤになると、世界の神さまに、唯一の神になっています。世界に君臨するただ一つの神といつて、つきぬけています。イザヤにおいては、キリストが「父よ」と言っているのと同質になっていますから、他のものを排他しない。偶像はダメだよ。偶像はダメだけれども、他の生けるいろいろな宗教的な事態がある。そういうものは全部ひくめてしまう。だから、私は仏教でも何でも楽しんで読んでいる。みなそこに素晴らしい真理がある。仏教の第一流の坊さんなんてものは本当に大したものですよ、キリストの直弟子と同じような次元にいるから。どうぞ、そういうことで、間違えないでください。

● 汝はわが有なり

イザヤ書43章の初めの方にもどります。

「ヤコブよなんじを創造せるエホバいま如此^{かく}いい給う。イスラエルよ汝をつくれるもの今かく言給う。おそるるなかれ我なんじを贖えり。我なんじの名をよべり。汝はわが有^{もの}なり。」

「汝はわが有^{もの}なり」とはヘブライ語では「ジー・アッター」という。私に來ているもの。私から離れないもの。即我――この我は神さまの我です――私に即しているもの。

「お前さんは私に即して、もう一如の世界のものだぞ」

ということです。本来は、私たちはキリストに即している。即^{キリスト}なんです。それは十字架で贖われているからです。

「贖ったから私のものだ。お前を贖ったぞ、贖ったから私に即している」

と。贖われているから、私はキリストの中に入っているものなんです。これが「わが有^{もの}」という言い方です。離れていない。キリストに即している。内接している。別な言葉でいうと、

「汝はわが内接者なり」

ということ。内接者だから、私たちは祈るときは、十字架でキリストの中に入ってしまったているんだから、ここで祈る。この中は聖霊の世界です。だから、もうグーッとその中の



現実に入っていることを、祈りでもつていよいよ強く意識してくると、力がきます。そこからお願ひしてください。人の為にでも、自分の何かのことで。按手するでしょ。その人に手を按くことは即する世界です。遠くにいたって、私は遠隔祈禱をする。そうすると作用する。

2 なんじ水中みずのなかをすぐるときは我ともにあらん。河のなかを過ぐるときは水なんじの上にあふれじ。

これはイスラエルの民が紅海を渡ってきたあの歴史的な事態を言っているわけです。

なんじ火中ひのなかをゆくとき焚やるることなく火焰ほのおもまた燃えつかじ。

ダニエルの三人の友人がそうだった。

「心頭滅却すれば火もなお涼し」

と言つて死んでいった坊さんがいた。とにかく、こういう言葉は想像して言われたのではなくて、本当にそうなんだ。キリストの火の中に入ると、火が今度は熱くないという。初代の殉教者の中にはそういうのがある。火炙りひあぶりになろうとしたが、祈っていると、雨が降ってきて火を消してしまったという話がある。いろいろな場合が出てきますけれども。本当に焼かれても、笑つて死んでいった人もある。大したもんですよ。いかに信仰の事態が本当の現うつ、現実でなければならぬかということです。こういう言葉の中には本当に平伏して読んでいかないといかん。

3 我はエホバなんじの神イスラエルの聖者なんじの救主すくいぬしなり。われエジプトを予あたえてなんじの贖代あがないしろとなし、エテオピアとセバとをなんじに代う。

このようにしてお前を助けていくぞと。これはクロスの救いのことにかかつてくるわけです。

4 われ看みてなんじを宝とし尊きものとして亦なんじを愛す。この故にわれ人をもてなんじにかえ民をなんじの命にかえん。5 懼おそるるなかれ我なんじとともにより、我なんじの裔すえを東よりきたらせ西より汝をあつむべし。

これは捕囚から帰ってくるイスラエルの民のことを言っている。

6 われ北にむかいて釈ゆるせといひ

「釈せ」というのは、「イスラエルの民をゆるしてやつてくれと」ということ。

南にむかいて留とどむるなかれといわん。

南にむかつては、「そこに留めておかないで帰してくれと言ふ」ということです。

わが子輩こらを遠きよりきたらせ、わが女むすめらを地の極はてよりきたらせよ。

「女むすめら」というのはイスラエルの民という意味です。

7 すべてわが名をもて称えらるる者をきたらせよ、我かれらをわが栄光のために創造せり。われ曩さきにこれを造りかつ成しおわれり。

(すべてわが名をもて称えらるる者をきたらせよ、我かれらをわが栄光のため



に創造し形成しました完成せり。

「わが栄光のために創造し形成し完成する」

と、畳みかけて書いてある。これは素晴らしい。我々はキリストのために創造され形成され完成されている。これはみなキリストの力、神さまの力です。創造と完成はアルファとオメガです。形成はその真ん中。創造と形成と完成とは、初めと中と終りということです。ヘブライ語でいうと、アルファは「アレフ」で、オメガは「タウ」です。タウはまた十字架の形です。創造・形成・完成はみなキリストのためです。キリストが原因で、真ん中の中道で、完成です。

●われ自らの故に

²⁵われこそ我みずからの故によりてなんじの咎^{とが}をけし汝のつみを心にとめざるなれ。

43 章 25 節は最も注目すべき言葉の一つです。ここでも「われこそ我」というのは

「アノキー、アノキー、フーモーヘー」(私、私、その人は)

と畳みかけて書いてある。

「私、私、その人は消すものである、汝の罪を私の故に。また汝の罪を覚えていないぞ」

と。「心にとめざる」とは覚えていないという言葉です。「心の中に置いてはいないぞ」ということ。それは何のためかというのと、「私のためだ」という。

「われ自らの故に」

と。この「故に」は原因であり目的である。それは私自らが原因であり目的であるから、お前の咎も罪もみな赦したし忘れてしまう、心の中に置いてないということ。

よく、人の旧悪を覚えていてる人がある。

「でも、あいつはこんなことをした」

なんて、いつまでも言っている。そんなのはサタンになるよ。私はありがたいことに何でも忘れてしまう。悪いことだけでなく、良いことも忘れてしまうから申し訳ない。

即ち、神さまは、

「自分自身を原因とし目的として、私は全責任を負う。全責任を私は負うから、心配は要らんぞ」

ということ。プラスもマイナスも全部、神さまはひっくり返してキリストに在って負ってください。キリストが負ってください。キリストがプラスもマイナスも全部、本当のプラスにしてしまう。これがキリストの愛なんです。この愛に私たちは感激せざるを得ない。感激といったって、ただの感情ではない。全存在的に感激する。だから、全存在を投入していく。そして今度は、



「あなたのためなら身を捨てて行きます」

と言つて進んでいく。昔の武士道の中には、「主君のためには」というものがあつた。その代わり主君は部下の間違いを全部自分で責任を負う。

人間はお互いさま罪びとなんだから、互いに本当に赦しあつて進んでいかないとね。

「我らに負債ある者を我らの免したる如く、我らの負債をも免し給え」(マタイ 6・12)

という主の祈りにあるとおりです。赦すことは今度は逆に、愛することになっていくわけです。赦しよりも大事なものは、そこにくる愛なんです。背負つていく愛、担う愛です。

「我自らの故に」

というのが非常に大事なわけです。

「お前を考えて、どうではない。私だ。私が全責任を負っているんだ」

と。それが神さまの愛ということなんです。キリストはそのような神の愛を身証なさつた。身をもつて証しなさつた。そして、十字架の赦しに入つて、今度は聖霊を与えたことが正に愛なんだ。罪を消してしまつたのが十字架です。それで、私は無罪となつた。根元的に罪びとでなくなつた。

相対的人間小池は死に至るまで罪びとです。けれども、その奥に無がきて、それが聖霊によつて無限無量となつた。それは私だけでなく、皆さんもみな同じことです。

「無即無限無量」

という、その内容はとうてい限定することができない。それだから、もう本当に何とも言えない。

いいですか。これだけのもの凄い福音を生きていなかったら、もうつまらんですよ、せっかく、「福音」なんて言つたつて。だから、皆さんは一人ひとりがそのような証し人、そのような伝道者として隣人に一人二人と伝えてください。

